

77 誌上発表 『沙石集』の中の身体に関わる表現

計良 吉則

順天堂大学医学部医史学研究室

『沙石集』は鎌倉時代中期に、無住道暁により編纂された仏教説話集である。10巻からなり、説話数は150余りとなっている。弘安2年(1279年)に起筆、同6年(1283)に成立した。日本・中国・インドの諸国に題材を求め、霊験談や高僧伝、各地を遊歴した無住自身の見聞をもとに書いた諸国の事情、庶民生活の実態など、実に多様な内容となっている。その通俗で軽妙な語り口は、『徒然草』をはじめ、後世の狂言や落語に大きな影響を与えたとされる。

『沙石集』において、身体に関わる表現に着目し考察することは、当時の身体観を知るうえで、意味があると考えられる。

初めに、身体の動作や状態を示す表現に関して。「下る」「帰る」「参る」入る」などの体の移動や運動に関するものが圧倒的に多いのが特徴である。巻第一に「僧なむど御殿近く参らず」、「社壇にしては経をばあらはには持たず」や「大神宮をすかし出だし奉らむ為に」、「外宮の南の山のふもとを廻りて」などとある。

感情・精神作用に関するものが比較的多くみられ、巻第一に「善阿、『実に貴き御意楽なり』と随喜して」や「当時の蔵王権現とて恐ろしげなる御形を現じ給ひける時」がみられる。

存在を表すものも比較的多く、巻第一に「集まり居たる中に或いは親に遅れ」や「その時の人、今にありて侍り」とある。

老若に関するものは巻第一に「熊野の師が房に、なにがしの阿闍梨とか云ふ、若僧あり」、巻第二に「病む事もあれば薬までも問ひけり」、「俄に両目ともに盲てけり」がみられ、また「杖瀬河にて死ぬべかりし身の」や「禅定に入るが如く終られけり」とある。

生命誕生に関するものは、巻第二に「内院に生れて高祖大師をも拜み」や「生れ安き方は勝れたり」とある。

容貌などに対する美的表現は、巻第一に「若き者のみめ形なびらかに」や「御みめの美しくおはして」がみられる。

婚姻や契りに関するものは、巻第四に「まめやかに忍び忍び通いければ」がみられた。

次に、身体の部分や分泌物を表現したものに関して。圧倒的に多くみられるのが「身」で、巻第一に「我三宝の名をも言はじ、身にも近づけじ」や「身すくみてはたらかれず」などがみられた。

四肢に関するものも多く、巻第一に「足をよりてほけほけと物思ふ質にて」や巻第二に「宝の山に入りて手を空しうするとは」とある。

胸や腹などの体幹に関するものもみられ、巻第一に「胸ひしげて、あわて騒ぐ」とあり、巻第二に「これを服して腹の中の」とある。

頭、頸などの頭頸部に関するもののみられ、巻第一に「今日頭痛きなり」、「上人の頸に乗りて渡らせ給ひける」とある。

また、五孔を表すものがみられ、巻第一に「口には便ち空と説きて」、「御目は細々として愛らしく」とある。

分泌物に関するものでは巻第一に「随喜の涙を流されける」や「皆くひ切りて、血みどろになり」がみられた。

その他では、巻第一に「慚愧心肝に徹りて」という表現がみられたが、五臓としての心や肝ではなかった。また、医術の心得という意味合いで「医骨(いこつ)」という表現が巻第二にみられた。さらに、現代のヤブ医者に通じる「藪医師(やぶくすし)」が巻第三にみられたが、このような「藪」の用例としては最も古いものと思われた。